

雑談空間を構成する「スマホいじり」 —大学生の二者間会話場面のフィールドワーク— “Smartphone Fiddling” constituting a chatting space: A fieldwork of two-party conversational situations among university students

千田 真緒[†], 岡部 大介[‡], 市野 順子[‡]

Mao Chida, Daisuke Okabe, Junko Ichino

[†]東京都市大学大学院環境情報学研究科, [‡]東京都市大学メディア情報学部

Graduate School of Environmental Informatics, Tokyo City University

Faculty of Informatics, Tokyo City University

g2183119@tcu.ac.jp

概要

大学生は、どのようにスマートフォン(以下、スマホ)とともに日常会話空間をつくりあげているのかを考察した。その結果、大学生の日常会話空間のひとつである「空きコマ」における2者間の会話は、小刻みなスマホ利用によって「調整」されていることが見いだされた。「スマホいじり」とともになされる雑談は、観察された大学生の相互注視によって、スムーズに行われていた。

キーワード: 大学生, スマートフォン, 日常生活世界, フィールドワーク

1. 研究背景と目的

1.1 コミュニケーションにおける「スマホいじり」

街中のカフェなどで2者が雑談をしている様子を見ていると、時に、一方が話しているにもかかわらず、もう一方が「スマートフォン(スマホ)をいじり始める場面」を目にすることがある。または、2人で同じテーブルにつきながら、「お互い沈黙のままスマホをいじる場面」に出くわすこともある。一緒にいるのに会話をしない光景に、見ているこちらが少しハラハラしてしまう。しかし同時に、一方のスマホの画面が他方に共有されることで沈黙から会話へと移行したり、相手の「スマホいじり」の開始にあわせて自身のスマホを手にしたりと、人工物と人とのインタラクションによる巧妙な調整も、雑談場面では頻繁に観察される。

本稿では、大学のカフェテリア(の2名がけテーブル)の観察から、大学生2名の雑談の場の構成において、「スマホいじり」がどのように寄与しているのかを分析対象とする。学生たちは、お昼休みや講義と講義の間といった「空きコマ」にカフェテリアに集まり、何気ない日常会話を繰り返す。一見なにげなく行われているように見られるが、そこでは、人工物をお互いにいそがしく利用しながら、また、他者の行為に対応しな

がら、「空きコマの場」が生成されている。諏訪(2013)に則れば、わたしたちは「日常生活世界のなかで動的に対応する知が求められ」ており、その「対応」は、カフェテリアにおける何気ない会話と、そのとき手元にあるスマホのような当たり前の人工物との間においても生成されている。

1.2 会話における人工物を用いた私的ふるまい

会話場面における参加者は、常に互いの行動を注視しているだけでなく、その行動が自分に向けられているのかどうか、適切な行動はなにかを継続的に分析している(Goodwin, 1981)。Goodwin(1981)の喫煙中の会話場面における分析では、タバコという人工物に着目し、会話空間からの離脱と再参加の機会が検討されている。

例えば、2者のうち1人が喫煙状態にある時、喫煙者は、発話をやめるタイミングで、手に持っていたタバコを吸った。そのとき、視線は相手に向けられていなかった。Goodwin(1981)は、「タバコを吸うことによって発話できない状態であること」、そして、「視線を聞き手に向けていないこと」から、発話者は、自分が「その会話から一旦離れたこと」を表していると分析する。聞き手もまた、発話者のタバコを吸う行為から、発話者がその場から意識的に離れていることを認識している。聞き手であった非喫煙者は、喫煙者がタバコを吸い、タバコが口から離れた瞬間に発話した。そしてその発話内容は、喫煙者が発した内容の一部を切り取り、同じ言葉を用いたものであった。この発話のタイミングや内容から、聞き手は、喫煙者が再び会話場面に参加することを許容しているように捉えられる(Goodwin, 1981)。このように、2者が互いの行為を何気なく注視しあう共同参加によって会話場面がつくりあげられていることが示された。

なお、非会話場面においても、参加者は微細な修正を繰り返しながら、滑らかに空間を構築する。例えば Goodwin(1981)は、喫煙者がタバコに火をつけてもらう場面を取り上げている。喫煙者であるアンは、ジニーに火をつけてもらおうとするが、その間にアンの子どもの会話が発生する。このとき、火をつけようとライターを構えていたジニーは、ライターを「叩き」、伸ばしていた腕を引いた。アンは、子どもとのやりとりのち、ジニーの方に顔を向け直し、ジニーはなにごともしなかったように火をつけた。ジニーは、最初にアンに差し出したライターがうまく機能しなかったかのような「叩く」振る舞いをするので、その場をスムーズに取り繕った。

飲食場面においても、同様の分析が行われている。阿部他(2018)は、大学生相当の3者間会話場面の分析を通して、飲み物を飲む行為が、発話権を調整するリソースになっていることを示している。特に、ペットボトルの飲み物を飲むときは、飲み物を口に含むまでに、蓋を開けるという作業が発生する。その作業が、進行中の会話やその場面で起こっている相互行為を「観察する時間」を与えていると阿部他(2018)は分析する。

本稿で分析対象とするデータにおいても、(カップに入っている)飲み物を飲む場面は観察された。阿部他(2018)に沿えば、本稿で着目する「スマホいじり」の行為場面においても、スマホのカバーケースの開閉が、ペットボトルの蓋を開けるという明示的な行為のように、参加者にとって2者間会話を「観察する時間」となっている可能性がある。

会話場面における喫煙や飲食といった私的振る舞いは、個人に閉じた行為である。一方で「スマホいじり」は、喫煙や飲食とくらべて他者に「開かれた」行為となる場合もある。いわば、参加者どうし伝達しやす／されやすい行為であることが推察される。

1.3 テクノソーシャルな状況と「スマホいじり」

コミュニケーションにおける「スマホいじり」は、現代社会において出現した振る舞いである。Meyrowitz(1985)は、相互行為の秩序の構成を緻密な観察を元に記述し、その概念化を図ったゴフマン(1963)の理論を拡張し、対面的な状況とメディア環境を合わせた一連の情報システムの中で、ゴフマン理論を再検討する必要性を主張した。

メイロウィッツの考えをさらに進めたのが、岡部・伊藤(2006)の「テクノソーシャルな状況」に関する議論で

ある。岡部・伊藤(2006)は、メディア利用がより高度に相互行為の中に組み込まれるモバイルメディアの時代では、さまざまな場面でオフラインの場とオンラインの場がハイブリッドに結合した状況となり、空間的・時系列的な社会的境界がより拡張されていることを主張した。

例えば、現代のスマホ利用者たちは、各自の目の前にある状況の相互行為的秩序が壊れぬよう、社会的規範に反することがないように振る舞いながら、モバイルメディアを介して情報を得たり、他者と繋がったりする。岡部・伊藤(2006)は、こうした物理的制約を受けるオフラインにおける文脈と技術的制約を受けるオンラインにおける文脈が不可分に結びついた状況を「テクノソーシャルな状況」と呼び、メディア利用を含む相互行為を理解する上での基本的な概念として提示した。

このようなオンラインとオフライン、スマホと対峙する人びとという2つの文脈が併存する環境の中においては、「首尾よく」振る舞うには多くの巧みな行為が観察される。

1.4 本研究の目的

これまで示してきた背景のもと、本稿では、大学のカフェテリアで過ごす空きコマでの場面において、飲食物との関係だけを取り出すのではなく、「スマホいじり」が、2者の雑談のどのようなタイミングに観察され、それがいかに会話空間の構築に寄与しているのかを検討する。具体的には、「スマホいじり」が会話のどのタイミングで生起し、それらが大学の空きコマの雑談を構築するうえでどのように作用しているのかを分析する。これらの分析を通して、2者で「カフェテリアに居ること」への関与を維持しつつ、手で個人的な「スマホいじり」をすることへと関与する行為がいかにその場に適した形でなされているかを分析する。

2. 方法

2.1 日時・場所と分析対象者

2016年6月～7月の1ヶ月間、香川大学内にあるカフェテリアにて本稿のデータが撮影された。座席の真上からカメラで撮影し、テーブル上にある観葉植物のなかにマイクを設置した(図1)。香川大学の工学部倫理委員会の承認を経てデータ収集がなされた。観察対象となった大学生には、撮影後に調査の目的を説明し、協力が可能な場合は謝礼が支払われた。

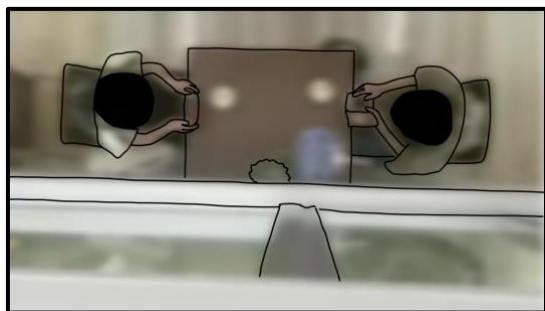


図1 撮影の人物・環境配置

撮影されたデータ 17 本のうち、音声が聞き取れないものや、睡眠または勉強時間が長く、会話場面がほとんど観察されないものを除いた 7 本のデータを分析対象とした。分析対象とした映像は、最も短いもので 15 分 11 秒、最も長いもので 33 分 27 秒である。いずれも大学生 2 名の会話場面であり、女性どうし 6 組、男性どうし 1 組からなる(表 1)。

表1 分析データの概要(撮影された日付順)

ID	性別	撮影時間
1	女性	15 分 11 秒
2	女性	23 分 26 秒
3	女性	33 分 27 秒
4	男性	19 分 07 秒
5	女性	26 分 57 秒
6	女性	29 分 32 秒
7	女性	25 分 19 秒

2.2 分析の手続き

映像分析ソフト ELAN(EUDICO Linguistic Annotator)を用いて、「発話内容」、「スマホいじり」、「スマホいじり以外の行為」に注釈をつけた。「スマホいじり」は、画面のスクロールや、机に置いたり、保持していたりする行為のことを指す。「スマホいじり以外の行為」とは、「飲む」行為や「食べる」行為、「離席」などの行為を指す。

3. 結果と考察

3.1 大学のカフェテリアでの雑談場面の概要

3.1.1 座席において見られる諸行為と出現回数

大学のカフェテリアにおける 2 者間会話場面を理解するために、7 組において観察された回数の多かった「飲む」行為、「スマホいじり」、「食べる」行為、「離席」の

5 つの行為の出現回数を確認した。なお「離席」とは、カフェテリアで注文した飲み物や食べ物を取りに行ったり、観察対象者以外の友人と話したりするために席を外すことを指す。

それぞれの行為が 7 組の映像データにおいて観察された回数をカウントした(表 2)。その結果、「飲む」行為が最も多く、25.93 回だった。次いで「スマホいじり」は、24.71 回、「食べる」行為が 5.07 回、「離席」が 1.79 回であった。

観察された「スマホいじり」に関連して、1 人当たりの 1 分間あたりのスマホの操作回数は、平均で 1.13 回、同様に飲む行為は平均 1.22 回観察された。観察対象となった大学生は、空きコマのカフェテリア利用時に、「飲む」行為と同程度「スマホいじり」をすることが分かる。カフェテリアにおける 2 者の会話場面においては、飲み物、スマホといった人工物とのかかわりをお互いに示しあいながら会話を構成していることが分かる。

表2 大学のカフェテリアにおける行為の回数

行為	平均(回)	回数/分
飲む	25.93	1.22
スマホ いじり	24.71	1.13
食べる	5.07	0.20
離席	1.79	0.09

3.1.2 スマホいじりのタイミング

上記 3.1.1 を通して、大学のカフェテリアにおいて、小刻みなスマホ利用とともに空きコマの会話がなされていることが確認された。ここでは、更に「スマホいじり」に焦点を当て、スマホを操作することが、会話のなかのどのタイミングで生起するのかを確認した。

「スマホいじり」が観察された状況が、「話題開始時」、「話題の間」、「話題収束時」のいずれであるかをカウントした(表 3)。さらに「話題の間」は、「スマホいじり」をした人が「発話者」であるか、または「聞き手」であるか、もしくは両者が話している「話題の間(両者発話)」、両者が話していない「話題の間(両者沈黙)」の 4 つに分類した。

なお、「話題開始時」は、発話とともに「スマホいじり」を始めたり、スマホを開いたりすることを指し、「話題の間(発話者)」は、会話において発話を始めた後に「スマホいじり」を始めたことを指す。表 3 は、7 組のデータの「スマホいじり」平均回数である。2 者とも話して

いる際にスマホを操作する「話題の間(両者発話)」が平均 5.57 回と最も多く、聞き手として会話している「話題の間(聞き手)」が 4.14 回観察された。あるトピックの発話を始めるとともに「スマホいじり」をする「話題開始時」は、1.43 回と最も少なかった。

表 3 「スマホいじり」の状況と平均回数

状況	平均(回)
話題開始時	1.43
話題の間(発話者)	1.71
話題の間(聞き手)	4.14
話題の間(両者発話)	5.57
話題の間(両者沈黙)	2.71
話題収束時	2.86

ここまで、大学のカフェテリアにおける 2 者間会話場面において観察される諸行為の概要と、特に「スマホいじり」が会話のどの部分ではじまるのかについて確認してきた。大学生は、お互い細切れにスマホに触れたり視線を送ったりする。こうしたメディア利用は、空きコマでなされる雑談の構築にどのように関わっているのかを捉えていくため、特徴的な場面を取り上げて質的に分析していく。

3.2 スマホ利用場面の質的分析

例えば会議場面と異なり、空きコマのように目的が曖昧なまま 2 者会話が進行する場面は、行為者である大学生が発話するタイミングや、「スマホいじり」のタイミングなどは、あらかじめ決まっていない。上野・西阪(2000)は、いつ、ある行為が実行されるのかということが、行為に先立って存在するものではなく、実際の行為の中で特定されていくことを示している。続く 2 つの事例では、2 者間会話に一旦関係のないように見える瑣末な「スマホいじり」の行為が、いかに「何気なく過ごす空きコマの会話空間」の時間を形作るかを質的に検討する。

3.2.1 発話の機会を探る「無意味なスクロール」

まず事例 1 において、特徴的な「スマホいじり」として、意図的とも無意図的ともとれる「スマホのスクロール」を終えると同時に発話を開始する場面を見ていく。事例 1 の場面は次の通りである。

〔事例 1〕 エスノグラフィックデータ(女性 2 名, ID1 の事例)

事例 1 の直前まで、両者とも発話をしない沈黙の時間が約 40 秒間続いていた。その沈黙の間、A は「スマホいじり」と「飲む」行為、B は「飲む」行為をしていた。その後、A は「ふわふわのかき氷もさ、」と発話すると同時にスマホの操作をやめた(図 3-(a))。そしてスマホを操作していた左手を飲み物に移行させた。その際、右手では、飲み物を机に置いていた(図 3-(b))。その後、両手を飲み物に移した(図 3-(c))。また、このとき B のスマホは、カバーを閉じたまま、常に机の上にあり、触れられることはなかった。

図 3-(a)の直前の、A がスマホを操作している指の動きに着目する。A は「ふわふわのかき氷もさ、」と発話する直前、スマホで Instagram のアプリケーションを表示し、それを縦に数回スクロールしていた(画面上のテキストや画像を判読、視認可能なスクロール速度を超えて、「無意味にスクロールしている」ように調査者には見えた)。そしてスクロールをやめると同時に発話し始めた。一方 B は、A がスクロールをしている間、飲み物を飲んでいて、A が「ふわふわのかき氷もさ、」と会話を再開した際に、B は A の発話を承認するかのようになり、飲み物を飲むことをやめ、A に顔を向けていた。その後、両者とも会話をしながらも飲み物を飲む行為は続けていた。

なお、坂井田(2020)にならい、事例 1 の身体的ふるまいを書き起こしている(図 2)。「右-身体」は、図 2 における B の身体的ふるまいを示している。また、A が発話している際、どの位置で身体的ふるまいが始まったかを、┌ の記号で表している。

B-身体 ┌ 飲むのをやめ、顔を上げる (図3-(a))
 A ふわふわのかき氷もさ、 (図3-(b))
 A-身体 ┌ スマホから指を離し終える (図3-(c))

図 2 事例 1 の身体的ふるまいの書き起こし

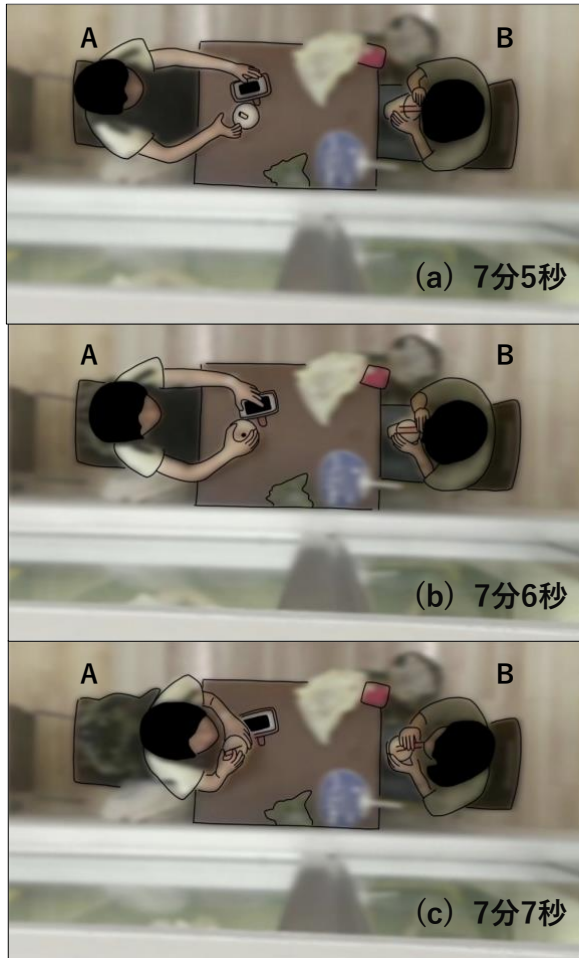


図3 事例1の身体的ふるまいの変遷

3.2.2 「カバー閉じ」の合図で「パン買ってくる」

次に事例2として、Aによる「スマホいじり」をやめる「スマホカバーを閉じる」という何気ない行為に誘われる形で、Bが離席する場面を見ていく。Aのスマホカバーを閉じる行為が沈黙を破り、会話を再開させる合図となり、それを目にしたBが、会話の再開の前に別の行為を開始する意思を告げた場面である。

[事例2] エスノグラフィックデータ(女性2名、ID 1の事例)
 図5では、まず、Aは頭部(視線)を左に逸らしながら、自身のスマホカバーケースを閉じ始めた(図5-(a))。Aがカバーを完全に閉じた際、Bはスマホのケースからカードを取り出そうとし(図5-(b))、約2秒後に(Bは)「パン買ってくる」と発話し、カードを取り出した(図5-(c))。Aは、このBの発話とオーバーラップする形で「うん」と発話し、Bの行為を承認した。なお、図4のBの「パン買ってくる」の発話がなされた約2分前に、BからAに向けてカフェテリアのパンに関する話題が出されていた。その際、Bからのパ

ンの話題に対してAが「そうなん?」というような対応をしていたことが確認された。図4におけるAの「うん」という発話が、Bの発話とオーバーラップしていることから、図5の場面においてBが「パンを買いに行く」ことを予見していた可能性が高い。

A-身体 スマホカバーを閉じ始める (図5-(a))
 A-身体 スマホカバーを閉じる (図5-(b))
 B (2秒後) ちょっとパン買ってくる (図5-(c))
 A うん

図4 事例2の身体的ふるまいの書き起こし

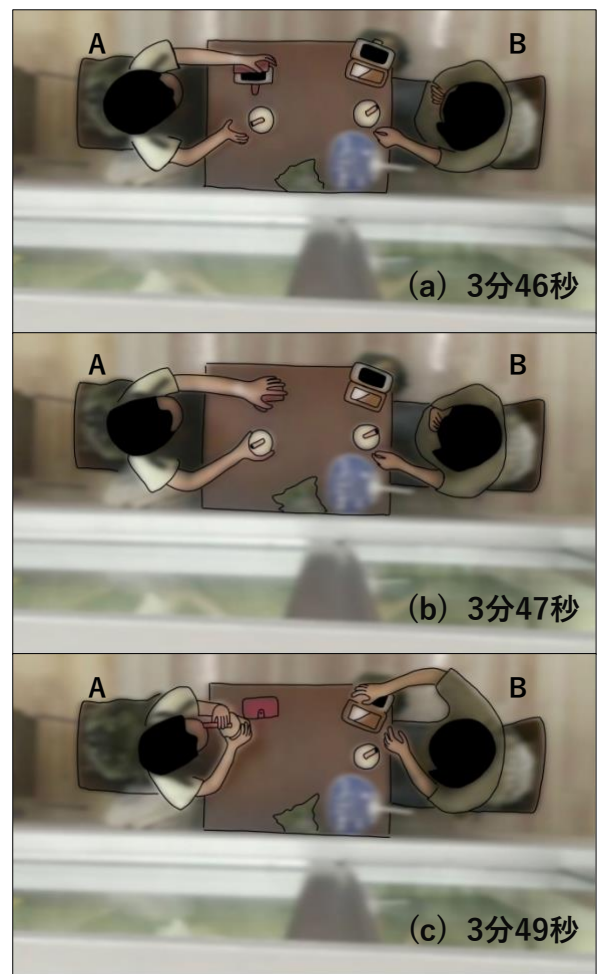


図5 事例2の身体的ふるまいの変遷

3.2.3 話題収束時の「カバー閉じ」

事例3では、事例1での「ふわふわのかき氷」の話題から、両者が気になっているかき氷屋をお互いに話している。共通の友人のInstagramの投稿から、行きたいかき氷屋を明確にしたものの、一方がスマホのカバーを閉じ、もう片方がスクロールを続けたことで、実際に

行く予定は立てずに話題が終了した場面である。

〔事例3〕 エスノグラフィックデータ(女性2名, ID 1の事例)

図7-(a)でBはAが示したかき氷に関するInstagramの投稿画面に対し、指差しをしながら「あ、それぞれ」と発話した。AとBが話していたかき氷屋が共通のものであることをお互いが認識した。その後、Bは自身のスマホカバーを閉じながら(図7-(b)), 「えっほんまに行きたい」と話し、飲み物を飲んだ。それに対し、Aも「行こうや」と答えながら、スマホを左手に保持したまま、飲む行為に移り、具体的な日程を決めることはなく、話題が終了した。Bの「うーん」という返答とともに、Aは画面のスクロールを再開し(図7-(c)), 再び沈黙の時間になった。

A-身体	画面を見せる	(図7-(a))
B	えっほんまに行きたい	
B-身体	└ スマホカバーを閉じる	(図7-(b))
A-身体	スクロールを再開する	(図7-(c))

図6 事例3の身体的ふるまいの書き起こし

事例1から3において、Bは、Aによる(意図的とも無意図的ともとれる)一見些細なスマホ利用に誘われるように、再開された会話に参加したり、立ち上がってパンを買いに行くという別の行為に移る契機として利用したりしていた。空きコマにおける2者会話は、なにごともなく円滑に進んでいるように見えるものの、互いが常に互いの行為を注視しあって織り成されているものであった。大学生たちは、身体動作に加え、スマホというメディアにも着目しながら、会話の中断や再開、行為の開始などを調整していたのである。

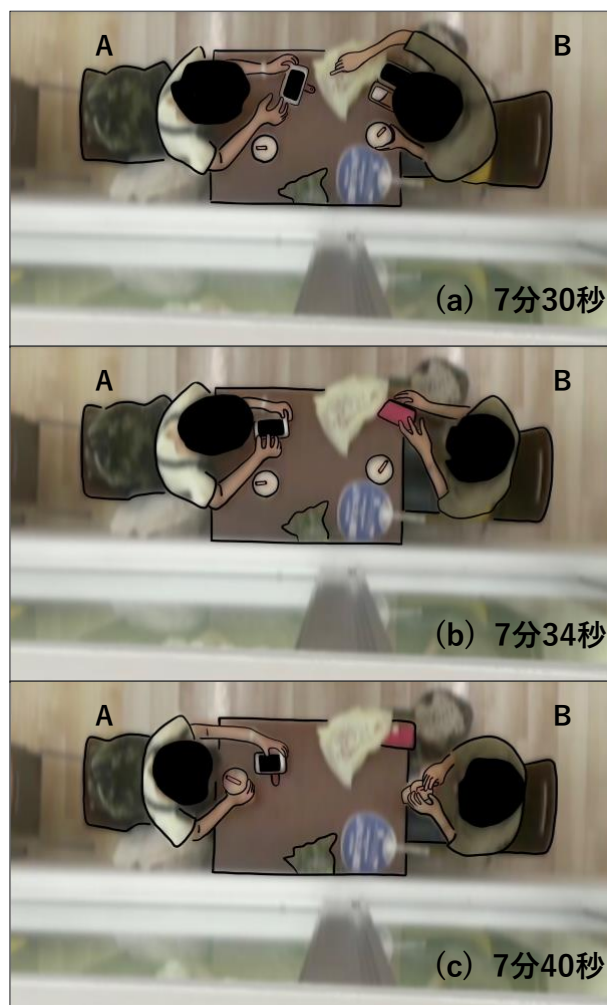


図7 事例3の身体的ふるまいの変遷

4. まとめ

本研究では、大学生の空きコマにおける質的な分析を通して、大学生は、いかにスマホを用いながら会話空間をつくりあげているのかについて考察してきた。対象の大学生たちの間で、空きコマに代表されるゆるやかな対話空間を維持するため、スマホを用いた互いの行為の察知と動的対応が細かに行われていた。何気ない2者間会話の断片の多くは、会話の相手のみならず、メディアとの相互行為を含んで調整され続けるものである。雑談とともに行われる「スマホいじり」は、一見些末な身体所作であるものの、実は、彼ら彼女らのコミュニケーションの時間を形成しているのである。

文献

- [1] 阿部廣二・牧野遼作・門田圭祐・山本敦・古山宣洋, (2018) “いつなら飲んでも良い? 雑談場面における“飲むこと”の相互行為的調整”, 2018年度日本認知科学会第35回大会, Vol. 35, pp. 685-694.

- [2] Goffman, E. (1963) "Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity", Englewood Cliffs, N.J: Prentice-Hall. (ゴフマン, E. 石黒毅(訳)(1980)“ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ”, せりか書房).
- [3] Goodwin, C. (1981) "Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers", London, Academic Press.
- [4] 岡部 大介・伊藤 瑞子, (2006). “ネゴシエーションの馬としての電車内空間” 松田 美佐・岡部 大介・伊藤 瑞子 (編). ケータイのある風景——テクノロジーの日常化を考える, 北大路書房.
- [5] Meyrowitz, J. (1985) “No Sense of Place: The Impact of the Electronic Media on Social Behavior”, Oxford, Oxford University Press.
- [6] 坂井田瑠衣, (2020)“相手のふるまいに寄り添う——日常会話の間合い”, 伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也・諏訪正樹(編), 「間合い」とは何か—二人称的身体論(pp.66-67), 春秋社.
- [7] 諏訪正樹, (2013)“見せて魅せる研究土壌——研究者が学びあうために”, 人工知能学会誌, Vol.28, No.5, pp.695-701.
- [8] 上野直樹・西阪仰, (2000) “インタラクション—人工知能と心”, 大修館書店.